外国語部会

“世界”とつながる「ことば」の学び（２年次）

１　研究の内容

（１）これまでの研究と研究テーマについて

本部会では，多様な他者と関わり互いに理解し合おうとするとともに地球に生きる一市民としてグローバルな視点（世界の様々な文化や習慣,価値観を尊重し，様々な背景をもった人々と共に生きていくための広い視野）をもって考え行動しようとする子どもの姿を目指し，研究を重ねてきた。

2018 年度からの４年間は，「『世界』に生きる“わたし”」というテーマを掲げ，子どもたちの外国語との出会いは「世界」との出会い，そして新たな見方による日本や日本語との出会いでありたいという願いのもと，世界の文化や人々を感じながら学習する外国語教育について考えてきた。学習づくりにおいては①「ことば」への「引っかかり」を広げる②関わりの中で試行錯誤する③「世界」を自分とつなげてとらえる の３つの視点を重点においた。成果としては，日本語と比べながら外国語（英語だけでなく）をとらえようとしたりことばの背景にある文化を考えようとしたりする姿や，外来語の由来から他言語と日本語との関係性に関心をもつ姿，国際的な課題（難民問題）への取り組みを通して国際問題に対して自分ができることを考えようとしたり行動を起こそうとするきっかけとなった様子をみることができた。同時に，グローバル市民の育成と言語教育の関係性や言語教育と国際理解教育が互いに影響し合う言語学習についての整理，そこに密接に関わる複言語主義の位置付けを明らかにしていくこと，その上で外国語の有効性や意味が子どもたちの生活や行動の中にどのように結びついていくのかを見とっていくことが，今後も考え続けていきたい課題として残った。

そこで，昨年度からは「“世界”とつながる『ことば』の学び」を新テーマとして掲げ，グローバル・シティズンシップと言語教育とのつながりを考えながら「ことば」の学びにフォーカスしていくこととした。外国語を学ぶことで出会う様々な「ことば」を通して，子ども自身の“世界”が広がる，見える“世界”が新しくなる，“世界”と自分がつながることを実感する経験を大切に重ねていくことのできるような外国語の学びについて考えていく。そして引き続き，なぜことば，そして外国語を学ぶのかということを問い続けていく。

新テーマの１年目であった昨年度は，異文化間コミュニケーションを通して言語活動が活性化される場づくりと，複数の言語に触れることを通して異文化を理解しようとしたりことばに対する視野が広がったりするきっかけとなるような言語活動について考えた。前者については，留学生との交流会を行い，３回にわたって同じ相手とテーマを決めて話し合う場を設け，子どもたちがコミュニケーション能力（communicative competence）における要素の一つである方略的能力（strategic competence）（Canale & Swain;1980）を働かせながら想いを伝え合おうとする様子や，日本語を外国語として捉え直すような様子をみることができた。また，後者については，子どもたちにとって身近なあいさつやオノマトペを題材とし，多言語それぞれの音や文字に触れることを通して差異や多様性への感受性が育まれる様相をみた。しかし，多言語に触れて言語の多様性を実感するということがゴールなのではなく，実感をスタートとして，ことばから文化を知ったりその奥にあるものを感じようとしたりすることができるような活動につなげていくことが今後の課題として挙げられた。そこで今年度は，言語の多様性の実感から気づきへとつなげていくことを意識し，実践を行っていくことにした。

（２）今年度の研究

多文化共生社会における外国語教育においては，英語習得や英語運用能力の向上ばかりを目指すのではなく，ことばを学ぶことを，文化を学ぶことであると同時に一人ひとりが個の世界を再構築し自己の認識・意識を更新していく営みととらえ，異文化間能力（細川や大木，2015）や， OECD のキー・コンピテンシーに加え相手を受容する態度をもちながら自分自身で考えて発信していく能力（當作, 2014）を大切に考えていきたい。多文化共生はコミュニケーションと異文化理解から成立し，アイデンティテ

ィの確立，ことばについての認識，差異に関する開かれた心が不可欠な要素と考えられるが，このいずれも英会話だけを目的とした言語学習により習得できることではない（鳥飼，2021）。自己と他者の認識，ことばについての豊かな感性，ことばの面白さと怖さへの気づきこそが豊かな言語生活の土台を築くことになるだろう。そうしたものを経験しながら学ぶことのできるような活性化された言語活動，外国語の授業のあり方を考えていきたい。

また，グローバル化と同時に多言語社会へも向かっている世界や日本の状況とあわせ，複言語・複文化主義についての再考も引き続き行っていく。福田・吉村（2010）は，EU やイギリスの言語意識教育を日本の外国語教育に導入することを提案する。言語意識教育は，その中核に「言語への気づき／言語意識」（Language Awareness）の概念をもち，母語と外国語教育の架け橋として提案された。言語への気づきには，「情緒，社会，権力，認知，運用」の五つの領域が設定されている。その後，複言語・複文化主義においても外国語の学習を通じて言語やその背後にある文化への気づきを養うものとして取り入れられ，Downes によって多言語言語意識モデルが提唱されて実践されるようになった。そこで示される「児童たちに言語意識教育を行う目的」は，①コミュニケーションの現象について興味を刺激する②言語学習を文脈の中に入れ込む③諸言語の領域や，なぜそれほど多くの言語があるのか，言語がどのように変化し発達していくのかを示す④注意深い観察を奨励し，聴解力を養う ということであり，異なる外国語を学ぶことによって外国語を相対化し，言語とはどういうものか，また言語を学ぶとはどういうことかに気づかせると同時に，様々な文化に触れ，文化の多様性も意識させるという（開かれたリテラシー教育）。このモデルを日本にそのまま適用できるわけではないが，単一言語主義に基づく外国語教育からの脱却には参考になる部分が多くあると考える。今年度は，そうした複言語の学習を外国語科の学習内容と結びつけながら行うことを意識し，子どもたちの中に言語への気づきが生まれていく様相や，その気づきからさらに広がり得る見方や考え方についても考察したい。

（３）研究主題「学びをあむ」との関連（メタ認知的スキル・社会情意的スキルについて）

外国語の学びにおける主体性は，子ども自身が外国語や世界についてもっと知りたい，分かるようになりたい，外国の人々と分かり合いたいと願うところから生まれると考える。子どもたちは外国語や外国の人々との出会い等を通して感じたこと，考えたことをもとに自身のことばや文化，考え方を見つめ直し，そこで生まれる新たな視点でまた学びを重ねていく。その中で自身の考えやそれまで当たり前と思っていたことが揺らいだり崩れたりすることもあろうが，そうした経験も，「あみ直」しによって自己の更新，問いの更新となり，さらなる探究へと学びが発展していくと考えられる。

外国語の学びにおいて育成されるメタ認知スキル・社会情意的スキルについては右の図に示した。母語におけるメタ言語能力を働かせながら，外国語や外国に生きる人々について思いをはせたり問いをもって探究していったりする姿を期待したい。そのために，子ども自身が立てた問いについて，せまり方を自身で計画し，学びを進めていくことができるような場を保障していきたい。そうしたとき，教師は，子どもに何とどのように出会わせ，何を考えさせ経験させるのかということを常に大切に考えながら活動をつくる必要があるだろう。

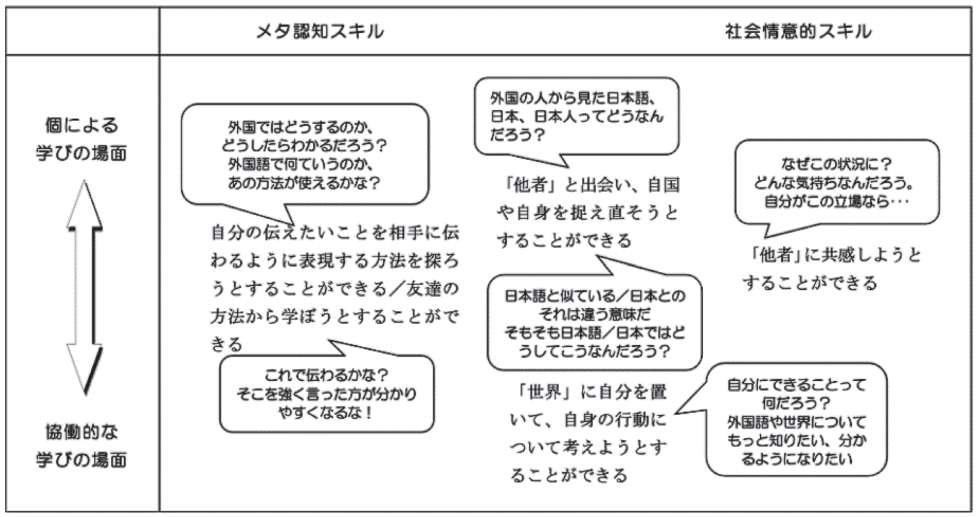

図　外国語の学びにおけるメタ認知スキル・社会情意的スキル

２　授業実践からみた子どもたちの姿

（１）言語への気づきをうながす活動

子どもたちの言語への意識や気づきは，様々な活動の中に組み込まれることで効果的に発揮されたり育まれたりすると考える。そこで，そうした活動を行った場面を以下に挙げる。

①なぜ外国語を学ぶのだろう

第５学年の授業びらきは，子どもたちと外国語を学習する意味について考えるところから行った。How many languages are there in the world?，What is the most spoken language in the world?，There are elementary schools around the world which choose Japanese as a foreign language. True or false?などといったクイズを通し，知っている言語を挙げ合ったり言語人口の移り変わりをグラフで確認したりしながら，外国語へのイメージを広げていった。子どもたちは，世界にある言語の数の多さに驚くとともに，方言も一つの言語として数える地域があることや，文字を持たない言語もあること，日本語の言語人口も意外と世界の上位であること，そして現在も外国語として日本語を学習している人々が世界には大勢いることを知り，喜んだり驚いたりしていた。その日のふり返りには，「外国語を勉強する意味はいろいろあるなと思った」「日本語を勉強してくれている人が世界にもいるというのはうれしい。そうした人たちの言葉を私も勉強して，お互いに教え合えたらいいな」などと，自分なりの外国語を学ぶ意味を考えようとするものが見られた。

②世界のあいさつと文字

知っている世界の「こんにちは」を出し合った後，英語，フランス語，スペイン語，中国語，タイ語，韓国語など 10 ヶ国語の「こんにちは」と「さようなら」の歌を歌う活動を行った。この歌の中にはエスペラント語も登場するのだが，それを目にした子どもたちは口々に「エスペラントってどこだっけ？」「そんな国聞いたことない気がする…」「どこかの植民地じゃない？」などとつぶやく。そこで調べ学習を行い，「世界共通語」という概念に触れる。「それがあったら確かに便利だ！」ということが共通理解されながらも，それではなぜ今自分たちはエスペラント語を知らないのだろうというところに思いを巡らせ，言語と人々や文化の関係について考える活動へと繋がっていった。

このような活動を経ながら歌うことで様々な言語のあいさつ言葉に慣れ親しんだところで初めて，子どもたちはそれぞれが文字で示された歌詞カードを目にする。そこでの文字を種類分けし，ラテン文字（英語，フランス語，ドイツ語，スペイン語，エスペラント語），ハングル（韓国語），漢字（中国語），仮名文字（日本語），タイ文字（タイ語）ディーヴァナーガリー文字（ヒンディー語），キリル文字（ロシア語）を知ると，その多様さに驚くとともに，それぞれの仕組みを調べようとしたりビルマ文字やギリシア文字などといった他の文字を調べて紹介する子どもが現れたりした。

③世界の１２ヶ月の名前

“When is your birthday?”の単元で英語の 12 ヶ月の表現を学習した際，「なんで英語では日本語みたいに月を１，２って数えないんだろう？」という子どもの疑問を拾い，そこから月名の由来についての調べ学習を行ったり，月名と由来それぞれをカードにしてカルタのように関係を話し合って予想する活動を行ったりしている。また，そこから派生して生まれてくる「じゃあ日本だけが数字で月を数えているのかな？」といった問いを拾い，他言語における月名について調べて発表し合ったり，そこから見えてくる言語間の相関についても考察したりすることもできた。

④世界の新年

頻度副詞に慣れ親しむことを目的とする“I sometimes walk the dog.”の単元での導入では，In Japan, we usually eat *osechi* on New Year’s Day. We say “明けましておめでとうございます”.といった表現を使って日本の新年の行事や慣習を表した後，世界の新年の行事や慣習についてグループごとに調べた。その後，In Spain, they usually eat 12 grapes at countdown. They say “¡Feliz Año Nuevo!”.などといった形で発表し合い，様々な新年の慣習や新年のあいさつに触れた。ブラジルについて調べたグループが They say “Feliz Ano Novo! ”.と発表すると，すぐに「あれ？スペインのあいさつと似てる」という声が

挙がり，「ブラジルもスペイン語？」「ポルトガル語…あ，ポルトガルとスペインって隣だからか！」と言語の広がりへの気づきにつながるような発言もあった。

（２）異文化に触れ感じたことをコミュニケーションに生かす

今年度の第６学年の子どもたちは，昨年度までに様々な活動を通して多言語や多文化に出会い，言語の多様さやそれらのつながりに気づいてきた経験をもっている。今年度は，そうした経験を活かしながら自己を創造して発信していくことを目指し，自己について英語で表現し伝える（発表する）方法を多面的に学ぶことをねらいとしてきた。

自己紹介やまち紹介などの活動を通し，聞く人をひきつけるような声の大きさや表情の明るさ，聞く人の理解を助けるようなジェスチャーなどの大切さに気づきながら，流動的に組まれるペアで互いに伝え合う場合，学級全体に伝える場合，話される内容についてのほとんどが初めて知ることだという相手に伝える場合など，それぞれに伝える際の違いにも留意しながら伝える様子も見られるようになってきた。一方で，それらにはある程度の限界があり，緩急，強弱，抑揚，間などといった効果的な表現方法は現れなかった。そこで，実際の英語スピーチに触れ，それを真似ることでパフォーマンス的にせまるという活動を行った。①自身の情熱を語るもの（トヨタ自動車株式会社の佐藤恒治社長による全米ディーラー大会（2023）でのスピーチ）②感謝の思いを述べるもの（俳優の Emma Watson 氏による People’s Choice Awards（2013）での受賞スピーチ）③全ての人への教育を訴えるもの（Malala Yousafzai 氏による国連総会（2013）でのスピーチ）④気候変動の深刻さを訴えるもの（COP26（2021）に合わせて国連開発計画（UNDP）が制作したメッセージ動画“Don’t Choose Extinction”での恐竜のスピーチ）と，目的の異なる４つのスピーチに触れ，パフォーマンスに注目させて気づきを促した。ここで扱った４つのスピーチのうちの２つは，英語を外国語として使う人がスピーカーとなっている。世界の人々に思いを伝えるツールとして英語を使い自らを表現している様子に触れながらそのスピーチを真似ることを通し，多文化共生を体感しながら自身でも自信をもって表現していこうとする子どもの姿を目指した。

子どもたちは，スピーチの受け手となって純粋に話し手の思いや意図を受け止めようとしながらその際の効果を見つけていった。また，選んだスピーチに近づけるよう練習を重ねる中でも様々な気づきを得，発表会では，ことばに軽重をつけ，以前に行った発表とはまた違った堂々とした様子で聴衆一人ひとりに目線を配りながら話すような様子も見られた。同時に，「それぞれの人の伝えたいことをとても真けんに語っていた。目線などで伝えたいことがわかって感動した。私もいつか，国のためにスピーチをしてみたいと思った」というふり返りにも見られるように，パフォーマンス的な効果という伝えるための工夫を意識する以前に，伝えたいという強い思いや内容があることが重要だということを体感していったことも興味深かった。

３　今後に向けて

多文化共生のための外国語教育には，「リアルを通して学ぶ」ことが不可欠でありどのようなリアルと出会わせるかということも重要なポイントになると考える。また，そこで子どもたちが何に気づき，それまでの様々な経験と繋げたりそれらを活かしたりしながらどのようにアクティブなグローバル・シティズンに育っていくのかを考察する必要があるだろう。同時に今後は，Downes による多言語言語意識モデルを分析しながら外国語科の学習内容と結び，単元を構成することも試みたいと考えている。

（濱）

〈引用・参考文献〉
當作靖彦（2014 年）「グローバル人材育成のために-社会と教育の果たすべき責任とは」西山教行，平畑奈美編著『「グローバル人材」再考』くろしお出版
福田浩子・吉村雅仁（2010 年）「多言語・多文化に開かれたリテラシー教育を目指して–日本の小学校における言語意識教育の提案」細川英雄，西山教行編『複言語・複文化主義とは何か–ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』くろしお出版
細川英雄ほか編（2016 年）『市民性形成とことばの教育–母語・第二言語・外国語を超えて』くろしお出版
鳥飼玖美子（2021 年）「小学校英語教育–異文化コミュニケーションの視点から」大津由紀雄，亘理陽一編著『どうする，小学校英語？-狂騒曲のあとさき』慶應義塾大学出版会